

霞

—2016年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成28年10月1日発行(通巻第36号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(36)

古写真「大正時代の土浦高等女学校生徒」



目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(36)	1
○博物館からのお知らせ	1
【館長講座、特別公開、テーマ展他】	
○古代の発火具(古代)	2
○巡方(古代)	3
○姫松(近世)	4
○自省録(近代)	5
○市史編さんだより	6
○地域と博物館	7
○霞短信「戦争の記憶の聞き取り調査に協力して」	8
○コラム(36)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

大正8(1919)年頃の土浦高等女学校生徒です。当時の標準服(制服)は、木綿の着物に、えび茶色の袴で、袴の裾には白線(白いテープ)が1本縫い付けてありました。髪型は束髪で、長く伸ばした髪を後ろでゴムひもで結わえ、その先を丸めてピン留め、前はふっくらと高く持ち上げています。履物は雨の日でも白足袋に下駄でした。

【情報ライブラリー検索キーワード「女学校」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ テーマ:「常陸における古代の織物」

10月30日(日)・11月20日(日)・12月18日(日)

時間:午後2時~(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

※10月30日(日)は史跡めぐりです(詳細は、お問い合わせください)。

★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

9月15日(木)~10月10日(月) 体育の日 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品を紹介します。

★★テーマ展「藤森弘庵—土浦藩儒者の13年」★★ 10月22日(土)~12月4日(日)

館蔵資料をもとに、土浦に滞在していた藤森弘庵の13年間の足跡を紹介します。

○講演会「藤森弘庵著『春雨楼詩鈔』について」 11月13日(日)午後1時30分~3時

講師:日本大学専任講師 佐藤 温氏 会場:博物館視聴覚ホール 定員:70名

○展示案内会 10月23日(日)・11月3日(木)・12月4日(日) いずれも午後1時~1時30分

○土浦二高茶道部によるお茶会 11月3日(木)午後0時30分~3時 菓子代:200円 定員:100名

★★文化財愛護の会写真展★★ 9月15日(木)~10月15日(土)

★無料開館★ 11月3日(木)文化の日、11月13日(日)県民の日

★今年度の秋季展示は10月1日(土)~12月25日(日)までです。



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

はっかぐ
古代の発火具
ひうちいし
— 火打石 —

古くから火は人と親密な関係にあり、寒さに対する暖となり、食べ物を加熱調理する場合や暗闇を照らすあかりなどとして利用され、宗教儀礼や産業などの活動においても重要な役割を担いました。

火を起こす発火具による火種の作り方には、大きく2つの方法があります。一つは、木の棒と板を用いて摩擦により高熱の木屑を火種とする摩擦式発火法です。他方は、メノウや玉髓などの火打石を鋼の火打金でたたき、飛び散る火花をもとに火種を作る火花式発火法です。国内では、摩擦式発火法が縄文時代から存在し、火花式発火法の出現は火打金の出土などから7世紀後半頃と考えられます。

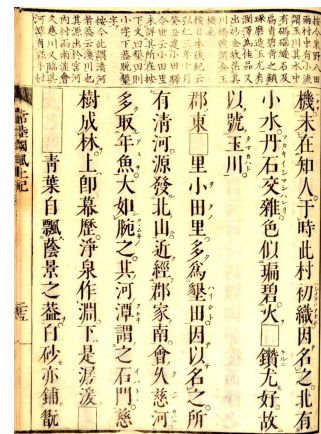
土浦市内のおおつ野にあった石橋北遺跡では、多数の竪穴住居や倉庫群からなる平安時代の大規模な集落跡がみつかりました。いくつかの竪穴住居跡などから赤みを帯びたメノウ片がみつかり、市内でも初めての出土事例といえます。これらの多くは大きさ2.5cm以下の扁平なもので、板状のメノウ原石を打ち欠いたものでした。虫眼鏡で観察すると、多くは角の一部が打撃によりつぶれ、その周辺には点々と赤錆のような付着が見られました。これらの特徴はメノウ片が火打石であることを示し、火打金を使った種火作りが行われていた痕跡と考えられます。残念ながら、石橋北の集落では火打金はみつかりません。

この赤みを帯びたメノウについては、古墳時代の装身具である勾玉の材料として知られますが、火打石の石材としてはあまり認識されていません。しかしながら、奈良時代前半に編さんされた地誌である『常陸国風土記』の中に興味深い記載があります。茨城県北部の「久慈郡」の条では、「丹石交雑」「火口鑛 尤好」などの記述がみえ、久慈川支流の玉川で産出する赤みを帯びたメノウが火打石として適していることが記されています。現在でも、常陸大宮市内の玉川では同じようなメノウ原石が採集できます。

石橋北遺跡出土の火打石は、県北部の玉川で採集されたメノウ原石が流通・利用された可能性を示す好例といえ、『常陸国風土記』の火打石の記載を裏付けるものと考えられます。(関口満)



石橋北遺跡出土の火打石（当館所蔵）



『常陸国風土記』版本（当館所蔵）

10/22（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 『常陸国風土記』版本（当館所蔵）
- 弁才天遺跡出土の火打石（当館所蔵）



じゅんぼう
巡方

—平安時代の帯飾り—

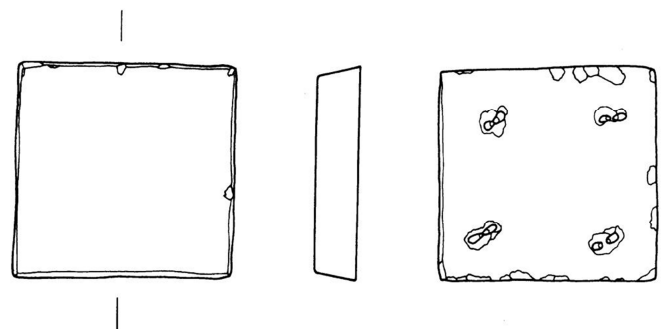
下の写真は、縦横およそ4cm、厚さ0.8cmほどの緑がかった灰色をした石です。横からみると断面は台形になっており、石を丁寧に磨いていることも観察できます。これは、平安時代の官人（国家の役人）が身に着けた帯の飾りで巡方と呼ばれています。土浦市沖宿町の入ノ上遺跡で出土しました。

当時の男性の官人が身に着ける帯は、革製で黒い漆が塗られたものです。革帯に開けられた穴にバックル部分の留め金を通すもので、構造は現在の男性用ベルトによく似ています。帯の表面には、銅や石で作った帯飾りを一列に装着します。形状は大きく分けて二つあり、一つは丸鞆と呼ばれるカマボコ^{まるとも}の断面のような形状のもの、もうひとつが四角い巡方です。平安時代前期頃までは丸鞆と巡方を合わせて10～12個程度を帯に装着したようです。平城京や平安京でも帯飾りは見つかっていますが、およそ8世紀の終わりから9世紀の初め頃にかけて銅製から石製へと変化することがわかっています。入ノ上遺跡で出土した巡方も9～10世紀頃のものともよいでしょう。

平たい石をどのように革製の帯にとりつけたのでしょうか。その痕跡が巡方の裏面に残っています。裏面の四隅には2個ずつ小さな穴が開けられ、中につながっています。ここに細い針金のようなものを通し、帯の裏側につける金具にくくりつけたものと思われる。

巡方が出土した入ノ上遺跡は釉薬^{うわぐすり}をかけた高級な陶器も見つかった遺跡ですが、基本的な性格はムラの跡です。ムラの有力者が位階をもつ下級の官人であったかもしれませんし、ムラを訪れた官人の帯から外れたとも考えられます。いずれにしても古代の帯は国家の官人であることの証であり、その帯を飾る巡方や丸鞆は国家の権威を象徴するものとして庶民の目には映ったと考えられます。

（堀部猛）



入ノ上遺跡出土の巡方（表）
（当館所蔵）

同（裏）

同実測図（左：表、中：側面、右：裏）
〈発掘調査報告書『入ノ上遺跡』より〉

11/5（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 短刀（当館所蔵、入ノ上遺跡出土）
- 八陵鏡（当館所蔵、入ノ上遺跡出土）



2016年度 秋季の展示資料解説③ 近世

ひめまつ 姫松

— 土屋数直手作りの茶杓 —

茶杓とは茶さじともいい、抹茶をすくう細長いさじです。竹や象牙、金属、木地や漆塗りなどもありますが、佗茶では亭主が客をもてなすために自作の竹茶杓でもてなすことがゆかしいとされました。

この茶杓は土屋数直（1608～79）の手作りです。数直は、土屋忠直の次男で幼名を辰之助といい、大和守、のち但馬守に叙任されました。元和5（1619）年12歳で徳川家光の側近となり、寛永9（1632）年に進物番、寛永18年に書院番組頭、慶安元（1648）年に小姓組番頭、承応2（1653）年に徳川家綱の側衆、寛文5（1665）年幕府老中に昇進し、寛文9年、常陸国土浦城とその周辺の領有を許され、土屋家土浦藩初代藩主になりました。家光への忠誠心が深く、謹慎中にもかかわらず上洛する家光に付き従った逸話が伝わっています（「有言録」）。

数直は風雅を愛し、茶の湯を小堀遠州に学びました。自作の茶杓には「姫松」と銘（道具などにつけられる名前）をつけましたが、由来となった和歌が筒に記されています。「大淀のみそぎ幾代になりぬらむ 神さびにたる浦のひめ松」（平安時代の歌人、源兼澄の作）。「大淀」とは、三重県多気郡明和町大淀の古名で、伊勢湾に臨む砂浜を大淀の浦といい、伊勢神宮斎宮の禊（神事の前に身を洗い清めること）の場所として知られています。「大淀の浜では何代にわたって禊が行われたのであろう、松も神々しいさまをしているよ」と浜辺の松を賞賛した古歌です。

このように和歌から銘をつけることを歌銘といい、遠州はこれを得意としていました。遠州に学んだ数直の筒書は遠州の筆法を意識した肥瘦のはっきりした書体です。

戦国時代の粗放な風紀が残る江戸時代初期において、数直が茶杓を削っていたことは、茶の湯を深く愛し、理解しようとする心だてを有していたことを示す貴重な証拠です。

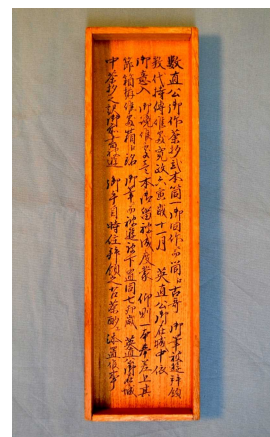
実は、茶杓「姫松」が重要な理由はもう一つあります。外箱の箱書きを7代藩主英直がしていることです。この箱書きには寛政6（1794）年、英直が土浦城に帰城中、数直の茶杓が2本あるのを見せられ、1本を手元に置いたとあります。

英直は寛政11（1799）年、藩校郁文館を設置しました。また、数直ら藩祖の逸話を集めた「御代々様逸話」を編さんさせました。このような時期に茶杓「姫松」が見いだされ、尊崇のよりどころとされた事情は、江戸後期の土浦藩のありようを考えるうえで重要です。

「姫松」は平成28年度のはじめに博物館が購入して収集したもので、今回の展示が初のお披露目です。（木塚久仁子）



筒・茶杓「姫松」
（当館所蔵）



「姫松」外箱
（当館所蔵）

10/1（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 瀬戸茶入 銘「塩屋」（当館所蔵）（土屋家の文化コーナーに展示）
- 「資料紹介 有言録—土浦藩主の横顔」（当館紀要第21号所収）
（1F受付にて閲覧、購入できます）



じせいろく 自省録

—戦時下の土浦高等女学校生徒の日記—

昭和18(1943)年9月、女学校や国民学校を卒業しまだ就職していない14歳以上の女性たちの動員が決定され、19年8月には学徒勤労令がくと きんろうれいが施行されました。土浦高等女学校(現土浦第二高等学校)の4年3組だった酒井ちい子さん(昭和3年烏山生まれ)も、海軍の軍需工場である第一海軍航空廠だいいちかいこんこうくうしょう(現土浦市右籾にある陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地とその周辺)で働くこととなります。酒井さんが同年8月10日から12月31日までの生活を綴った自省録(日記)は、時々検印があり先生の目を意識し書かれたという性格をもちますが、学業半ばに動員された女学生の仕事・学校・家族への心情を垣間見ることができます。以下に一部を抜粋しました。

八月十九日 土曜 晴

(前略)私は発動機部に配属された。(中略)発動機各部分品の名称を覚えるために、ノートに筆記した。約八十種位あった。こんなに覚えられようか。寮へ帰ってから防空壕掘りをやった(注:当初は全員に入寮が義務付けられた)。戦争に休みなし!明日は日曜だが家に帰れない。でも誰か家の人が面会に来てくれるだろう。待っているのが、とっても楽しい。

八月二十三日 水曜 晴

朝から職場について一生懸命働いた。始めは勝手がわからないので中々効率が上がらない。午後、女工員の一部分の人が、仕事を休めて遊んでいるのを見受けた。こんなに余裕があるのなら、何も私達まで動員して働かせなくても好いではないか?とつくづく考えた。(後略)

十月一日 日曜 雨後曇

今日からいよいよ自宅通勤となった。(中略)サイパン玉砕ぎよくさいの悲報が発表されて間もない今日再びテニヤンおおみやじま、大官島(注:グアムのこと)全員玉砕の悲報を見るに至った。私達は、これに応じて一生懸命働かねばならぬ。

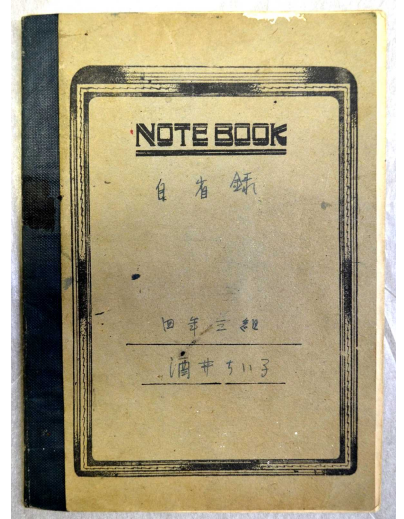
十二月二十三日 土曜 晴

(前略)午前四時と午後九時に警戒警報が発令された。(中略)1月1日には学校にて拝賀式はいがしきを行うよう廠長しょうちょうの許可を得たとの塚原先生のお話だった。あのなつかしい校門をくぐるのは幾月振りかしら。

※一部現代かなづかいに改めています。

霞ヶ浦海軍航空隊の一員ともいえる動員学徒として「頑張ろう」と自らを鼓舞しつつも、女学校に行けずに働くという現実、やるせない思いを抱いていた様子もうかがうことができます。残念ながら昭和20年1月1日以降の日記は残っていませんが、2月16・17日には航空廠に対する空襲もありました。目の粗い国防色こくぼうしょくの作業着かみかぜに身を包み、神風の鉢巻姿はちまきすがたで油だらけになって働いた酒井さんたちでしたが、3月に卒業となります。酒井さんは家の農業を手伝い、農業要員として食糧増産に励むなか、8月の終戦を迎えました。(野田礼子)

※本稿は、平成27年度聞き取り調査と網田悠希氏の卒業論文も参考に執筆しました。



自省録(当館所蔵)

11/19(土) 11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 航空廠に動員された土浦高等女学校生徒(写真パネル)
- 土浦高等女学校生徒の防空頭巾(当館所蔵)



市史編さんだより

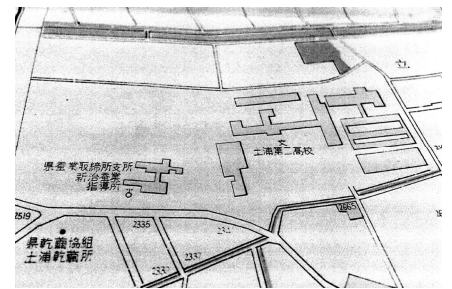
新聞から見えてくる土浦の町 —養蚕を通じて—

長い年月をかけて、土浦市立図書館及び茨城県立歴史館に保管されている「いはらき新聞」を中心に明治 24 (1891) 年から昭和 29 (1954) 年の土浦関係記事収集作業が終わりました。現在は記事の分類作業を少しずつ進めながら、遠い日の土浦の町に思いを巡らせています。

「土浦ってどんな町？」そんな問いかけがあれば、「商店が軒を連ね、沢山の人々が行き交い、活気あふれる町」と答えます。土浦の在方に生まれ育った私にとっての土浦は「まち」であり、「土浦のまちに行く」そんな存在でした。改めて県南の中心としての賑わいの姿が心地よく蘇ります。

土浦市は明治 22 (1889) 年土浦町となり、ついで真鍋町と合併して昭和 15 (1940) 年土浦市となりました。その後隣接町村と合併し、近年更に新治村との合併により現在の市域となっていることは既にご存じの通りです。

新聞の掲載記事を読みいきますと、明治中期土浦町とその隣接地域で農業の副業として始められた養蚕業に関わる記事の多いことに気づきます。現在の土浦の町の様子から養蚕業との関係を探りつづけるのはなかなか難しいことと思いますが、幼かった私の思い出の中に、我が家の隣家に一軒だけでしたが養蚕に携わる農家がありました。また小学校に向かう通学路には所々に桑畑が点在し、土浦二高の近くには高い煙突のある(乾繭の文字の残る?) 倉庫らしき建物がありました。



昭和 40 年『土浦市街図』より

明治 24 年創刊のいはらき新聞では「明治 28 年石岡町にあった^{さんしゅ}蚕種検査所が土浦町に移転し、土浦への検査員として富岡小宗次が任命される。」との掲載から養蚕に関する記事が始まり、春蚕・秋蚕の最盛期における繭相場の現況や、水害など自然災害による繭の減収状況、生繭乾燥所事業実況(豊島庄十郎・海老原清兵衛)、^{けん}県是製糸土浦工場の繭買い入れと各銀行倉庫への貯蔵状況、桑苗植え付け状況等の現況が連日のように掲載されています。また、建物に注目すると蚕病予防(母蛾検査など)事務所土浦出張所の設置(明治 41 年)・藤沢村常陸農園による土浦町への販売店出店(同 42 年)・土浦高等女学校の養蚕室新築工事入札(大正元年)・下高津に蚕種冷蔵庫施設の設置(同 2 年)・各町村への蚕業共同組合の設置(同 7 年)・県蚕業取締所土浦支部の新築(同 8 年)・土浦繭倉庫勾橋埋立地への倉庫増設(同 14 年)の記事があります。また他地域との関係でみると、土浦駅より春繭を甲州岡谷館と信州諏訪方面への輸送・土浦町での大日本蚕糸会茨城支会総会及び品評会協賛会開催(同 6 年)・土浦にて女子蚕業講習会実施・農商務省より土浦町への視察(同 8 年)・土浦繭糸市場から甲信地方への製糸状況視察(同 14 年)・蚕業取締土浦支所から福島宮城方面視察(同 15 年)・春秋蚕の最盛期には中央・東海道・磐越線など生繭輸送のため臨時列車の運転などの記事がありました。さらに経済面でみると、繭相場の高値を見込み土浦町の各銀行が無担保での資金貸付の実施を行うなど、記事の内容は多岐にわたります。土浦の町は養蚕業を通して常南地域の中心であり、関東一の繭集散地であり、土浦駅からの生繭発送量は最盛期(大正後期)には連日 50 貨車となり、一ヶ月 4000 t にも達していたそうです。養蚕業は土浦町の発展を考える時、欠かすことの出来ない産業であったという事がわかります。

今後、時代と共に歩んできた土浦の町の様子を知る手掛かりの一つとして、新聞記事を通して政治・経済・教育・文化・都市計画など、更に視点を変えながらお伝えしていく事ができればと思います。

(市史編さん係非常勤職員 國枝文江)

地域と博物館

博物館と展示（４） ～地域博物館の展示活動～

3回にわたり、常設展示、企画展・特別展、展示改装を視点に、展示の考え方や取り組み方についてご紹介してきました。いずれも、地域博物館としての当館の性格を反映した内容となっていますが、あらためて地域博物館の展示活動について、博物館の現代的課題や当館の四半世紀の歩みを参考に、今後の展望を提示したいと思います。

博物館における展示活動は、本来、博物館の重要な役割である資料の収集保存と調査研究を基礎に、その成果を市民に公開するものです。つまり、博物館の四つの役割が、①収集保存→②調査研究→③展示公開→④教育普及というサイクルで、段階を踏んで循環するのが理想的な博物館活動と考えられています。

しかし、博物館も運営上外向きの顔を重視する傾向にあり、活動は公開活用が先行し、必然的に業務の重点は展示活動に置かれることが多くなります。とくに近年、主催する博物館は、集客力のある展示企画を優先して開催し、先行研究が蓄積された著名な資料群の展覧会が好評を博しています。

このような博物館の動向からは、地道に資料の掘り起こしや見直しを行い、調査研究の成果を公開するような展覧会は歓迎されなくなってきています。先々、地域博物館が主体的に行うべき、資料や情報、研究成果の蓄積を重視する博物館活動が困難な状況になることが危惧されます。

当館では、開館以来、基本的に地域に根ざした調査研究と展覧会を両輪に博物館活動を進めてきました。これは、地域固有の歴史や新たな地域像の解明に向けて、学芸員が調査研究の必要なテーマを設け展覧会を企画し、その開催を契機に資料の収集や調査研究につなげていくものです。当館の活動のスタイルであり、特徴でもあります。

集客に重きをおく展示活動は、博物館の知名度を高め、博物館を市民の身近な存在とすることに貢献し、効果的な活動と言えます。ただ、博物館の基本的性格は、一過性の目先の成果を期待するものではなく、長期的な視野に基づくものでなければなりません。地域博物館が行う資料の掘り起こしと見直しに裏打ちされた展示活動は、その成果が市民に周知されると共に長く博物館に蓄積されることが重要であり、将来的に地域の歴史資産としてさまざまな活用も期待される重要かつ根本的な活動と考えられます。（塩谷修）

〈地域資料の収集保存と調査研究に基づく展示〉



「土浦藩お抱え絵師 岡部洞水」のコーナー



「土浦地域の近代教育 土浦幼稚園」のコーナー

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、戦争に関する聞き取り調査にご協力していただいた片倉幸子さんに寄稿していただきました。

戦争の記憶の聞き取り調査に協力して

私は土浦市三中地区の民生委員をしています。民生委員の仕事の一つに1人暮らしの高齢者の見守りがあり、定期的にお宅を訪問します。夏に熱中症対策などのためのお声かけでお宅を回ると、何かの拍子に戦争の頃のお話が出ます。私だけが聞き取るのは、申し訳ないという気持ちを前々から抱いていました。

そんな折、公民館で「戦争に関する記憶・体験談を募集します」というチラシを見つけました。募集期限は過ぎていましたが、博物館にお電話したところ、まだ受け付けますとのことで、私の担当地区の荒川沖にお住まいで、戦争当時の記憶を語ることを承諾してくださった5名の方を博物館に紹介することになりました。

聞き取り調査の前に、生年月日や簡単な内容を記す「アンケート調査票」を提出することになっていましたが、自分で書くのは大変だとおっしゃるので、私がお聞きして代筆させていただき、聞き取り当日は、私もできる限り同席させていただきました。博物館の学芸員さんや専門の方にお話を聞き取っていただき、私は肩の荷が下りる気がしました。

ご本人たちは記録に値すると思っていないことであっても、博物館が記録することで、後の時代に残しておく意味が生まれてくるのだと認識できましたし、そのことをご本人たちに伝えると、どの方も嬉しそうでした。このことを通して、私は、毎日何気なく過ぎてゆく生活を記録に残すことに意味があること、博物館はそれを記録として後世に残す役割を担っていることを改めて知ることができました。（片倉幸子）

コラム (36) 「戦争体験のお話をきく」を開催して

今年の8月12日、「戦争体験のお話をきく」として体験談をきく会を2階展示ホールで開催しました。これは当館初の試みで、昨年度スタートした聞き取り調査協力者の生の声を、市民の皆さんに届けようと企画したものです。

計画段階で、時期尚早ではないかという思いもありました。「戦場には行っていないから戦争体験はしていない」とおっしゃる方も多く、特別に体験を語る活動をされてない方々には荷が重いのではないかと…。心配はありましたが、思い切って調査の初期段階からの協力者にご相談したところ、富田善利^{よしとし}さん（学童疎開と東京大空襲）、酒井ちい子^{やすつぐ}さん（土浦高等女学校・勤労動員）、斉藤保次^{やすつぐ}さん（土浦中学校・予科練）に語っていただくことができました。親子で聴講された方もおり、限られた時間のなかではありましたが、語り手と聞き手で戦争について思う時と場を共有できたことは、意義あることだったと考えています。（野田礼子）

情報ライブラリー更新状況

【2016・10・1現在の登録数】

古写真 567点（+5）

絵葉書 479点（+5）

※（ ）内は2016年7月5日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2016年度

秋季展示室だより（通巻第36号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）は、

博物館2階庭園展示です。

2016年度秋季展示は、2016年10月1日（土）～12月25日（日）となります。「霞」2016年度冬季展示室だより（通巻第37号）は2017年1月5日（木）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）